

# マレーシアから日本への架け橋

—— AAJの学生に必要な日本語とは何か ——

吉川 達

山口大学の留学生の中には、トドンと呼ばれるスカーフを常に頭にかぶっている学生がいる。彼女たちはムスリム、つまりイスラム教の学生である。その中でもマレーシアから来た留学生が、山口大学には多い。実際私が人文学部の学生で、日本語の授業に参加していた時も、トドンをかぶったマレーシアの留学生を見かけた。マレーシアから来たムスリムの留学生は、まず間違いなく国費留学生で、しかもそのほとんどが *Anbang Asuhan Japan* (「日本への架け橋」の意。以下「AAJ」というコースの学生たちである。

縁あって、現在私はそのAAJコースで日本語を教えている。AAJは、マレーシアのマラヤ大学内に設置された日本留学特別コースで、二年間の予備教育機関である。そのコースの学生は、高校卒業後にマレーシア全土から集められた学生たちで、AAJで二年間、日本語、数学、物理、化学、英語を勉強した後、日本の国立大学に国費で留学する。全員が理系の学生である。AAJの授業は日本語はもとより、数学、物理、化学の各教科も日本から派遣された日本人教師によって日本語で行われる。そして、二年のコースの最後にある合否判定の試験に通った学生だけが日本への切符を手に入れることができる。

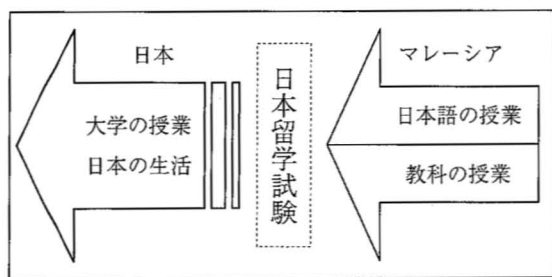


図1. 日本留学までの道のり

学生時代に私が出会ったトドンをかぶった留学生は、実はそのようなコースを経て山口大学に留学してきた学生だったのである。本年度よりAAJでは、日本留学の合否判定の試験として「日本留学試験」が採用されることになった。日本留学試験は、日本

のほとんどの大学が採用している留学生の試験で、日本のセンター試験のようなものである。AAJの学生は、日本人から日本語の授業を受けつつ、教科

の授業も受け、日本留学試験をパスして、日本に留学する。日本に留学してからは、日本社会の中で生活し、大学の授業も受ける。

このような過程を経る彼らにとって必要な日本語力とはどのようなものであろうか。大学の

授業を受けるならば、高度な聴解力が必要であろうし、日本人と意思疎通を図るためには、話す力も必要であろう。一口に授業を聞くといつても、大学の授業と、A A Jでの教科の授業では、求められているものが異なるかもしれない。

一体どのような日本語が学生にとって必要なのかということは、日本語を教える上で最初に考えなければならないことである。しかし、そのコースや学校の歴史が長い場合、過去の実績や慣例を受け継いでいる場合が多く、シラバスやカリキュラムを省みる機会が少ない。教師も知らない間にそれらが当然のものとしてしまっていることがある。学生のニーズは常に動くものであり、それによって教える内容もある程度は変えていかなければならないのは当然である。A A Jは二十五年続いているコースであるが、日本留学試験が導入されたことで、今大きな転換期を迎えている。

そこで本稿では、A A Jの学生の状況を例にとつて、彼らが身に付けなければならない日本語の技能を再考したい。特に「読む」「書く」「聞く」「話す」の四技能別に、詳しく検討したい。

### 一、A A Jの日本語教育の現状

A A Jに入学したばかりの学生は、ほとんどが日本語を勉強したことがない学生である。学生は、その状態からたった二年で日本語に必要ない日本語力を身に付けなければならない。したがって、日本語学習の進度は速い。

入学してから半年間は、ほとんどの学習時間が日本語に充てられる。具体的には、週二十七時間(五十分/一時間)に加え、土曜日にも五時間日本語の授業がある。そしてその半年間で日本語の初級

学習を終える。初級学習を終えたところで、日本人教師による教科の授業が始まる。その後はコース終了まで、日本人による日本語と教科の授業が並行して行われていく。

初級の段階では、日本語能力の基礎となる文法、語彙、漢字を積み上げていくことに重点が置かれる。「文法積み上げ式」で日常生活に必要な文法や、文の骨格を成す文法を学習し、同時に語彙、漢字量を増やしていくという方法である。これはA A Jに限ったことではなく、国内外を問わずに日本語教育機関で広く見られるやり方である。ただし、漢字教育に関しては、漢字圏の日本語教育機関よりも時間をかけている。マレーシアには中華系マレーシア人も多数いるが、A A Jの学生は全て非漢字圏のマレー系の学生だからである。漢字教育は初級に限らず、コース全体を通して行われる。

そのようにして、入学から半年後に日本語の基礎となる初級が終了する。その後は中級段階に入つて、より抽象的な話題を扱いつつ、文法項目を積み上げ、さらに日本留学試験を目標としたトレーニングを積む。

### 二、教科の授業を受ける時に必要な能力

日本語学習の初級が終わった段階から数学、物理、化学の授業が日本人教師によつて行われる。授業を担当する日本人教師は文部科学省から派遣された現役の高校教師である。その授業を受ける際に必要な日本語の中心は、授業を「聞く」力である。

教科教員は、留学生に教えた経験がない者がほとんどであるが、日本人の高校生と同じように教えるわけにはいかなないと意識し、ゆっくり話したり、地域方言を出さないように心がけたりしている。し

かし実際には、つい早口になったり、いつの間にか普段の話し方になっていたりする。また、教師の思い込みから、日本語化した英語を話すこともある。教科教師の授業における話し言葉の特徴は、山口大学人文学部国語国文学会の『山口国文』第三十号にも報告したので、参照いただきたい。

このような状況を考えると、教科授業では、日本語の授業で見られるような制限された日本語ではなく、ほとんど「生」に近い日本語を聞く力が必要であると言える。

また、授業中には教師に当てられて、発表する機会がある。その時は、「話す」ことが求められるが、その機会は多くはない。また、発表すると言っても、詳しく事象を説明したりすることは少なく、教師の質問に答えるという、単語レベルの発話で済む場合が多い。そのため、高度な「話す」能力はここでは求められていない。

教科書の記述を読んで、その内容を理解する場合は、「読む」能力が必要になる。しかし、AAJでは、学生が自分ひとりで教科書を読んで内容を理解しなければならないという状況はほとんどない。授業中に教師が解説するからである。それよりは、教科書の記述ではなく、問題文を読む能力が必要である。試験の際はもちろん、宿題を解く際にも、まずは自分で問題を読んで、何が求められているかということを考えなければならぬ。教科の問題を解く以前に、日本語の問題文が正しく読めなければならぬのである。

したがって学生には、問題文といういわば特殊な日本語の文を読む能力が求められる。

問題を読んで解いた上で、もしくは解いている時に必要になるのは、答えを「書く」能力であるが、数学、物理、化学のような理系

科目は、記号や数字を使うことが多いので、作文を書く時のような日本語力は必要ない。また、選択式の解答方法も多い。ノートをとる場合も、日本語で書かなければならないという決まりはなく、母語に頼ることができる。「書く」能力もそれほど高度なものはない。

以上、教科の授業で必要な日本語能力をまとめると、

- ①「生」の話し言葉に近い日本語、それも数学、物理、化学という一般的ではない分野の日本語を「聞く」力
- ②問題文を読んで、何が問われているかを理解する読解力

の二点が大きなものとなる。教科の授業は、日本語の授業と並行して行われているので、教科の授業は、日本語の授業で勉強したことを実際に使う「演習」の場であると言うこともできる。

### 三、日本留学試験を受けるにあたって必要な日本語能力

AAJの学生の日本留学を決定する試験が日本留学試験である。AAJの学生に限らず、日本の大学入学を希望する留学生にとって避けては通れない試験である。そこで問われる日本語能力というのは「アカデミックジャパニーズ」と言われるものである。アカデミックジャパニーズの定義は、まだ揺れ動いている面があるが、大まかに言えば、「大学の授業を受けるために必要な日本語」と言うことができる。日本留学試験は、その能力があるかを問う試験として作られている。

日本留学試験の日本語の試験は、「聴解」「読解」「聴読解」「作文」

という四つの分野に分けられている。「聴読解」というのが聞きえないが、これは、図表や絵を見ながら音声聞き答えるという、聴解と読解が混合されたようなものである。日本留学試験は、試験の形式もさることながら、内容が非常に高度で難易度が高く、また一問にかけられる時間が短いため、日本人であつても満点が取れないことがよくある。

そこで求められる日本語能力は試験の内容を見てもわかる通り、四技能のうち「話す」ことを除いた全てである。ただし、作文以外の問題は、マークシート式であるため、「書く」能力は、作文試験においてのみ必要である。

また、問題の内容が学術的なことが中心であるため、単に日本語能力が高いだけでは高得点をとることはできない。高得点を取るには、それなりの知識や、解くためのスキルが必要である。それらがあると、背景知識や問題を解くスキルから、問題の先を予測しながら問題を解くというトップダウン型の思考ができるため、解答が楽になる。試験は、単なる日本語の知識だけではなく、それを利用したトップダウン型の思考までも求めている。

さらに日本留学試験は、日本語の試験だけでなく、数学、物理、化学、生物、総合科目（社会）といった、各教科の試験もある。その試験は、留学生用に作られたものとはいえず、日本のセンター試験に引けを取らないほどの難易度であるという。問題を解く際は、問題の内容以前に先にも述べたような問題文を読解する能力が必要になる。

日本留学試験で必要な日本語能力は次の3つである。

- ①試験形式に合わせた「読む」「書く」「聞く」能力
- ②①を有効に利用するためのトップダウン型の思考
- ③教科の問題文を読むための読解力

#### 四、日本への留学時に必要な日本語能力

日本留学後に必要な日本語能力は、まず生活のための日本語である。それらは初級段階である程度学習し、会話を中心に練習もしている。しかし、実際に「生」の日本語が使われている場面に海外の学生が接する機会は、少ない。日本へ渡航してからは、教室、教科書内で使われていたモデルの日本語とはかけ離れた「生」の日本語に学生は適応していかなければならない。さらに人間関係を広げていくならば、日本語を駆使して積極的にコミュニケーションの場を持たなければならず、それは言語能力だけでなく、性格に拠るところも大きくなってくる。いくら日本語ができたとしても、誰とも話さなければ、人間関係は広がらない。反対に、多少日本語がつたなくとも、明るく活動的な人は、人の輪に入りやすい。留学生にとつて、日本人の友達ができるかということは留学生生活の成功を大きく左右する。

大学の授業を受ける際には、かなり高度な日本語能力が必要である。大学の授業は講義形式が多いので、中でもまず必要になるのは「聞く」力である。これは、教科の授業の場合と同じであるが、大学の授業で話される言葉は、日本人を対象にしたもので、留学生にはほとんど配慮されていない。教科の授業は「生」に近いものがあるが、対象者は全員留学生であるため、配慮があった。しかも、大学の場合は、内容が多岐に渡り、学術的で、深く掘り下げられて

いるため、非常に高度な日本語能力が必要とされる。日本人学生ですら講義についていくことが難しい状況を考えると、留学生にとつてどれほどのことかは、想像に難くない。

また、レポートや論文を「書く」能力、ゼミで発表する「話す」能力、参考文献を「読む」能力など、大学生活においては総合的な能力が必要である。日本留学時に必要な日本語能力は以下の二点である。

①日常生活を送るために必要な「読む」「書く」「聞く」「話す」能力

②学術的な内容に特化した「読む」「書く」「聞く」「話す」能力

## 五、まとめ

以上、A A Jの学生がたどる過程を追いながら、その状況で必要な日本語能力の四技能を中心に見てきた。一言で日本語能力と言っても、それぞれの場面で求められている能力は違う。それを無視して、これまでの経験や慣習だけを判断材料に「何を教えるか」を考えていたのでは、効率的な学習効果は得られない。時間に制約がない学習者や、趣味として日本語を勉強している学習者ならば、ゆとりと時間を使って四技能をまんべんなく伸ばしていくのも良いかもしれない。しかし、A A Jはじめ、予備教育段階の学習者は、日本語学習に使える時間が限られており、いずれ日本語を道具として使っていかなければならない状況にある。そのような学習者には、何を教えて、何を教えないかという取捨選択を厳しく行う必要がある。

教える項目を増やすことは、比較的やりやすい。だが、今まで教えていたことを減らすという作業は、心理的に難しいことである。しかし、効率的なカリキュラムを組むならば、その作業は避けて通れない。

日本語試験の導入で転換期にあるA A Jのコースも今まで行われてきた教授内容を大幅に見直す必要がある、現在も進められている。日本語科としてはまず日本語試験で高得点をとることが目標となる。そのためのカリキュラムの見直しは、これまでも行われてきた。それはそのまま続けられるべきであろう。しかし、本稿で検討した教科の日本語に関しては、今まで日本語の授業では、ほとんど取り扱われてこなかった。教科の勉強がいずれ大学の専門の勉強につながっていくのは明白であり、教科で使われている日本語は、大学での専門日本語の基礎になる部分である。

また、A A Jの教科の授業は、「生」に近い日本語に接する機会でもある。海外の学習者にとつては、日本語を手段として「生きた」日本語に接する数少ない機会の一つなのである。それが日常的に行われているとなれば、その機会を日本語教育の一つのリソースにしない手はない。

今後A A Jの日本語科では、未だ手付かずの教科授業への対応を考えていかなければならないであろう。筆者も本稿で検討したことをもとに、今後のカリキュラムをもう一度見直したい。

(よしかわ・とおる)

